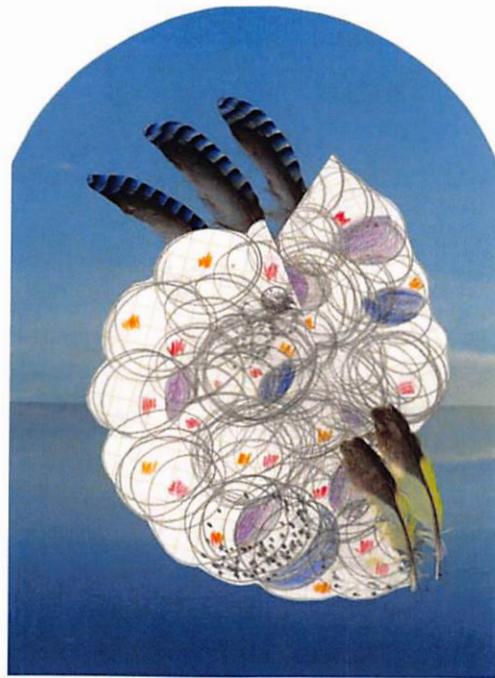


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021. 6



令和3年6月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第6号

No.757

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまだ北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二一年六月号（通巻七五七号）

◇今月の二十首詠……花水木

本田昌子 2

■作品[A]

中島央子・中島義雄 4
永井光子他 24

A C B A

中江京子他 54
長尾さち他 66

今村叶子他 82
田土成彦 71

■オリーブ集

大久保徳子・大倉美與子 42

◇今月の二人

片岡カヨ子・宍戸千佳子 38

香川進の生きものの歌 32

小林さゆみ 41

私と短歌との出会い（226）

久我田鶴子 40

『特集』玉井綾子 あつラカルト

短歌 ジェンダー

歌人論 中城ふみ子の短歌における「白」と「林」
歌人論 久我田鶴子 九冊の歌集にみる変化

■歌壇月旦
俵万智のじこと
西堤啓子

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子 50

佐藤光正 52

■遊覧寄港
〈西国三十三觀音巡り〉

御代田澄江 53

送風塔

谷川節子 73

■四月号作品批評

A……三浦好博・高津砂千子

千葉む津・茂木斌

B……山本孟・若林美知恵

C……谷川節子

オリーブ集……近藤芳仙

今月の二人・作品評

久我田鶴子 40

最近の歌誌より

〔編集部〕 73

クリップ……98

神田通信……表3

花水木

本田 昌子

昭和十一年生まれ。
昭和四十五年、地中海入社。
福島支社所属。

水害に切り裂かれたる傷をもち施設に身を置くいまのわたくし

あの時を考えまいと思うにも心の根っ子はまた水に向く

その方は謎めく目をして言い切りぬ 「ここは天国すぐに慣れるわ」

起きあがり小法師を頂くその面輪母に似ていると思う人より

タンポポを小川に流して追いかけて追いつけなかつた春のあのころ

痛いのは生きてる証拠寝て食つてそれで充分とう主治医のことば

「生きていてオモシエイ事なんにもねえ」元気そのもの九十四歳

過ぎてゆく時間を今日も追うのみのわたしにひらく花瓶のさくら

朝食をせかすノックの音高く思わず空気を握りしめたり

守るべきライバシーもないような声聞くときの背骨の音

昨日は陽気今朝はがらりとおし黙る人の個性にわたしを重ねる

話しぐれるその意味知らずそのままに面伏せて聴く聴くのみに居る
考えてどうにもならぬその奥処チエロの低音いまフォルテッシモ
風まじりの雨音つよし今までの記憶がつさりさらわれそうな

チエロの奏するイベルタンゴに遠き日の小さな傷の大きく疼く

錆びつきしことば動かずかみ合わぬ二人の間あいだを透くシューベルト

向き合いてさくら餅食む今のいま事の起ころぬ前の平穏

さりげなく小さなことばを重ねゆくおいしい時はおいしいと書いて

蕗のとうの香り苦みの天ぷらを配られし一個の春を味わう

もう今は春の真ん中この足で水木の花に切に会いたし

作品 A

中島央子

春疾風

森

友ねむる安房のあがたの九重あたり木連の白綿空にさゆらぐ
見のかぎり畠一面に培ふは今花の季ストック彩る
われにまだ歩ける脚のよろこびに花野の畦に立ちつくすなり
足すくふ春の疾風に立つ氣力大綱引ける老いのふんぱり
風の神あらぶるなけれ房州の春さきかけの花の畑に
春疾風野島岬のはるかより白波押しあげ響りつづくなり
また会はむ日のため花に「さやうなら」なぶりし風もしばし忘れて

中島義雄

花の後先

岡

一日経れば一日老いやく心地すれど一分二分五分咲く花を待つ
さくら咲く夕べとなれり共に見し者らはあはれ遠き水のいろ
老いの足勵まして出でし畠たそがれて刈り残したる菜の花香る
一面の黄砂が閉ざす空の下ばあんばあんと花暮れてゆく
涙ぐみうしろに立つは誰ならむ有漏の身に沁む花のま盛り
長生きをせよと憐き文置きて配達のバイク花浴びて去る
洗濯はさみ必死に保つ風吹きて視界の花は一気に終る

永塚節子

桜

銀

別れきて電車待つ間のしばらくを見るともなしに桜見ており
冷え増さるおうまがときの桜花無言のうちに手招きやまず
煩いをなべて遠ざけさくらさくら酔いたきものをはや散りそむる
来年の花見るまでの日月の長くかそけく不安の過る
ぱってりと紅の色濃き八重桜疎みいたりし日日ありき
ひさびさの懷石料理は桜づくし日にもうれしく舌にもうれし
添えられし桜の小枝卓上にいちにんの春充ちたりし春

仲西正子

海

沖

わが町の海を埋めるに新でなく移設と言いぬ那覇軍港の
明日への日を見送りし西の海に光りてならぬ軍艦の灯は
潮溜まり逃げず隠れず海風らは棒切れとなり動くともせず
この据礁いすれ埋め立てなる話ちさき魚も海風も知るや
ゆらりとぶオオゴマダラの影もまた低空飛行の爆音に怯ゆ
この島の幼き者よその耳に満たせてあれな「童神」の歌
九年母の若葉の先に苔あり純白なれば触れてはならず

白子れい 一刀彫り

・洛

浜本茉美 言葉

・夢

西の空にあるき月の笑みくる今朝の一歩を踏みしめ踏みしむ
古都奈良に学びし記念の内裏離ことしも取り出しあつものように
お元気?と笑みくる難に固まりいしころのゆるむ独りの宵を
一刀彫りの難求めて七十余年語りあいつつ慰められつ
内裏さまにお供え菓子は菱にあらで吾の好みなる饅頭数個
段飾りの難は故里ひと住まぬ家の倉庫に眠りておらん
春風に誘われ梅の花散れり鶯待たずひらひらひらり

ばかりようこ

トラウマ

・鹿

檜垣美保子

青天

・昂

トラウマを調教し得ず曳きつづく運命共同体うべなるかなや
ウマはウマでも裡なる暴れウマ誰か銅い慣らして下さらぬものか
子を生なせ夫婦父さん母さんと呼ばれしこと無し 当然なれども
父の日に燃える一花を瞬いて吊られし背広のボッケにさしぬ
タンボボの綿毛まろきをそと摘み渡されし日は奇しくも母の日
風荒びかよわき一樹をもてあそぶ雪柳の落涙とめどもなけれ
妖精の囁きあいとしあやしみつ 花群れのさやぎも失せてしまひぬ

浜谷久子

吹きだまり

・地

福田庸子

震災日近し

・今

駆けめぐる春の嵐にわらわらと覚醒していく木の根草の根
一つまた一つと湧き出る蕗の薹蘭ける小花の春の超速
蕗の薹春の知らせは脳髄の芯をびりりと再生させる
蕗味噌と蕗煮と蕗の天ぷらと春の食卓欠かせぬ熱飯
春の時早めるように土筆ん坊そこそこに伸び摘まれるを待つ
四角張る春に降りくる雨しづくひと息ふた息広がる安息
春が呼ぶ焦燥悔恨憂鬱のこんもり白く吹きだまりする

若者に人気あるらしグループのぼっちゃん頭の七人並ぶ
夜桜の下にて語る男の子二人未来の夢は明るく確か
保育所の鯉のぼり五匹向かい家の軒のあわいを元気に泳ぐ
筍の内側の皮姫皮とうなんとやさしきやまとことばの
幾年をかけて咲きいでしかマキシラリヤ五月の光くまなく吸いぬ
出不精となりたる吾に節子さんがアジサイの花鉢届けくれたり
「お化け干し」干しゆく手許をよぎりたり長く生ききて知らざる言葉
冬を越えあさかげを欲る窓ぎわにガラスのオブジェガラスの林檎
アスパラの春の一本そのままを天麩羅にして穗先から食む
青空の深さをさぐりのびてゆくひこうき雲は落ちてゆくがに
右側にすこしかたむく一株のゴールドクレスト青天を指し
榆の木のあらわなる根に腰おろす少年の背にあそぶこもれび
切株をかこみ群れ咲くむらさきの堇の花を喰ぐ犬の鼻
音のなくあたまをぬらす春の雨庭のさんしょの葉を摘みにゆく

藤田美智子

答へ

・新

牧雄彦

いま川は春

・大

前を向ひひとりづとる給食にほつとしてゐる少女もをらむ
わが知らぬわれを知らさる心地せり録音されし声を聞きつ
悩みなどないのでせうと問ふひとの求める答へを思ひめぐらす
涙溢る馬の眼を想ひしは十年前の春のこと
かたき笛を開かせてゆく力あり人の心を解くは何なる
重たさをこらへてゐる木蓮の花びら一枚今朝は落とせり
遠き記憶のなかにてわれはいつも鬼蹴られし伍の音響きけり

藤森巳行

白髪

・銀

松浦禎子

画廊にて

・羊

喜寿過ぎて染髪やめたら真白け浦島太郎になりたる氣分
髪染めをやめたら黒髪一本もなし見事なまでの爺になりたり
眞白な髪も悪くはないかもと鏡を覗き納得をする
二十年髪染めごまかし生きてきた歳より若いと言はれて欲しく
今日も朝すること決めて生きてゆく犬の散歩と確定申告
眠る前ベッドに正座し考へる限りある日を如何に生きたか
新調のブレザーを着て颯爽と卒園式に行く孫見送る

船田清子

海棠ざくら

・天

松瀬トヨ子

穂波

・沖

筋トレに励めるわれを嗤ふのか電柱の鴉くわうと啼きたり
ユキヤナギ、レンゲウ、モクレン咲き揃ひ町の公園に春溢れたり
レンゲウの花咲き続々遊歩道黄に染まりつつ園児らがゆく
暗き光分けつつゆるりと泳ぐ鯉冬を生きつきいま川は春
うつすらと黄砂にかすむ大阪のとぼくの高架を電車は動く
知らざりし福島の町大槌に双葉、浪江と今は忘れず
雨含む雲覆ひくる夕暮を記すこともなき日記を閉ぢぬ

紅白梅大地に踏ん張る根元のみ見定むしばし二月の画廊
左手に白梅の根元どっしりと坐りて今年も紅白梅図
年一度まみて春をよろこひぬ金に彩る波を貞中に
コロナ禍にも春はひそかに竹林の影を背にしてすぐる人あり
清々と若竹そぐく目交いにこのひとときを捧げ持ちたし
ミルクティーにケーキをそえて戴きぬ語らうるなきこの春の午後
光琳の屋敷図のもと成りとうその白壁を包む春の陽

車窓にしほんはり白きが眼をよぎる 一瞬おきて ああ白木蓮
日の光急にきらめき雪柳の満開に逢ふ さすがに彼岸
「春がすみ」つひに死語となりゆくや「P.M.25」のみが幅をきかせて
天界の人なる君や一年余コロナ／コロナの地上をいかに
コロナ禍の前なる君の旅立ちを喜ぶべしとかみしめ思ふ
べに色のつやあざやけく盛り上げてはる日に照り合ふ海棠ざくら
花咲かず芽吹かぬままに枯れ枯れしいのちの終りをただに見つむる

楠の葉にベンキのような糞おきて声置き鶴の夕べの茜
砂糖キビの穂波をわたる白き風冬深めつつ収穫を待つ
キビの穂にひかり集めてさやさやと鳥はしづかに甘くなりゆく
目に見えぬウイルスに日々家ごもり三寒四温めどうふ揺れる
サンビン茶黒糖そえられ介護士の「うさがいみそーれ」三時のおやつ
手を上げて深く息吸い息を吐く勝負師めきて朝の体操
夕陰に赤き花びら窄まりぬ土へと還る花仏桑華

松 永 智 子

ことばなく

・嵐

宮 本 靖 彦

春の花

・凌

おそれぬと死を語る声まともにしおそれもつわれことばなく居り
目前に迫りしことにあらざることさらによく生きるおろかに
死のちのことはかりがたくし人ら去りさめコーヒーひとりして飲む
真むかふをおそれるらしさりながらをうちがはに言ふ
あはあはとなりし哀楽さもあらむよはひ九十越えてふたとせ
連日の休暇のをはり十階のビルに音あり人の声あり
日の暮れのビルに常なることくきものの音またにんげんの声

三 浦 好 博

ワクチン

・銚

幾度も手を洗ふのも楽しまむマクベス夫人の台詞を言ひて
高齢者用ワクチンのリスク度を田舎暮らしは精査してをり
ワクチンを打つたか否かは内緒です「ワクチン警察」の圧力防止
我を敵と認識すらむスーパーの監視カメラに手を振りてみる
郵便は金額ピタリにするものと切手の端数買ひ揃へ置く（吝）
着々とドイツは原発さやうならあれから三千六百五十日
ボランティアに名を売りそして立候補お為ごかしと思ひし通り

三 木 ま り

吹 く

・昂

軽やかな音立てるように芽吹きゆく柿の若葉が陽に透けている

アルペジオゆるやかに指の動くさま柳が揺れる柳が芽吹く

まひるまの春の嵐吹きあげてまた吹き降ろし子雀がまどう

さくら大樹の折れた枝にも花満ちる子雀が集い花をついばむ

花びらが散り敷く道はやわらかく一步一步を今朝は確かめ

海、山を越えてはるばる来るツバメ春の嵐を突つ切って飛ぶ

中天にかかる三日月は鏡いろその弦を弾き風空に鳴る

妹の電話に語れば長くなり遅れし“歌会始”にも及ぶ

御 代 田 澄 江

辛夷咲く頃

・茨

いつ知らに白蓮咲きて華やげり枯れしと見えし山椒も芽吹く
きらきらと光遍き春の日に孫大学の進路決まりぬ
リモートの授業も多く友ら皆通ふと孫は自宅通学

土浦ゆ東京へ通ふと決めし孫 古関裕而の後輩となる

光帶び白き辛夷咲く墓邊通り里の庭には紅き辛夷咲く

里庭の辛夷盛れる下に生ふる躑躅の躑躅の家芭にせむ
咲き満ちて今朝散り初むる花莢し朝日に耀ふ白木蓮の
セビア色に汚れし真白な花弁散り白木蓮の刻移りゆく
満開の桜にかかる臘月老いの散歩の足とめ眺む
坂上り池をめぐりて咲く桜地にも水にも花びらを撒く
紫木蓮苔幾百屹立す宝塚歌劇開幕に似る
運動場の園児のごとし思ひ思ひの型にあそぶチユーリップ若葉
大中小サイズ気ままにチユーリップ色とりどりの苔ふくらむ

三 好 聖 二

かわす

・伊

うすがすみ纏える入江の漁り船双眼鏡に人ひとり立つ
轡聚めく美輪明宏の声ありて山の桜はほどろにひらく
蝶姫たちの交尾期過ぎて咲きそめる大き軀体の山さくら花
井のなかのかわすはかわすそのままに在れば世界につながるという
出かけたらなかなか帰らぬ娘のことを歩きお玉と昔日に言つ
昔日の安アパートに聞きいたりラヴィ・シャンカルのシタールの音
天城嶺をもとに落ち来る水ゆたか山葵田の辺に双手に掬う

茂木 熾 権八地蔵

・埼

山野幸司 母

・沖

春弥生権八地蔵の長土手に菜の花の黄がまぶしく続く
音高く湯水使へばわが家の節水部長の叱る声飛ぶ
きみまろのギャグのあれから四十年越えてわが家の五十年経つ
記念樹のこぶしは育ち草を取る畑に花かがやかす
その鳴き声すがた見たくも日本に棲まぬ笑ひ翡翠
畠土の思はぬ堅さ起こさんと振る万能の一撃浅し
このころはひよんな誤説をたびたびに十勝三股を十勝三敗

もとむらしげと

母のジグソーパズル

・そ

桃いろの花あふれたる武家通り香しきかなふるさとの風
母の家に花あふれ咲き「薩摩路」を歌う水森庭までひびく
弁当を二個買ってゆく母の家土曜の昼をふたりで過ごす
ジグソーがはまらないと嘆きつゝ母が座しいる縁の日だまり
犬猫のパズルは玄関に飾られて母と客との話題となりぬ
お喋りの途切れとときに「帰るよ」と母を見すしてさり気なく言つ
母よりの電話がありて暑き日に買いてゆきたる「まちがい探し」

山下雅子

似て非なる

・習

おだやかに西へ傾くその日さし孕むひかりのはや春のいろ
不要なるわれとせかして群る鳩小春日を浴ぶ園の日だまり
枯れ枯れの花穂のままあじさいはつんと新芽のさ綠いだく
見頃なる紅梅びっしり咲き揃うはなやぎまとうごつき枝々
はからずも晩年に知る蟻居の日々もて余すひまのなきをよろこぶ
シユーベルトとシーベルト何と似て非なる菩提樹聴きつつふと思ひおり
蒼天のいすこ目指すか真赤なる風船ひとつ見る見る小さし

養学登志子

ありがどう

・凌

玉ネギの間の草を抜く冬の日に額にじむ汗をぬぐいぬ
桜花田んぼの草も伸び伸びと天下泰平戦争嫌い
元氣出す草木の若芽ばっちやりと陽に輝けり微笑みながら
満州を娘と乙女らと連れきし母は語らぬ遺灰となりぬ
児を抱く娘の姿ほのぼのと母を映せり大きく見ゆる
二人児と戦後越えきし生活の母のアルバムどこにもなきか
欲もなくただ働きし母笑顔犬と散歩に天国へ行く

山本孟

失ひし命

・大

青春を軍閥政治に奪はれし真相を明かす半藤一利

盲爆に名も残らざる数万人されど本土決戦と呼びし軍政
昭和期の間にさぐりの手を入れて陽の目にさらす松本清張
国連の三代総長ウ・タント、ベトナム、中東の平和に尽くす
コーヒーの香り立つ居間一転す大地ゆるがす地球の力
大津波に家族さらはれ独り身をテレビは映す十年の悲しみ
妻のなしし皿洗ひなどなし終へて早たそがれぬ仏花の水替ふ

ありがとうよならと言えず遺影来る納得出来ぬままのさみしみ
燕尾服びしと身に添う指揮者立つ世の禍いを打ち払うが如
嘘三ついぶかしむ目をそがる即座に言うよ花粉症なの
水音のたゆることなき心字池鯉闊けさのままに動ける
睡蓮の真あかき巻葉のあわいより二三三四のめだか出で入る
年毎に一面土筆の生うる庭高き土壙の家とはなりぬ
古木より噴き出する」とひと房の生きいき咲ける桜いとしも

横田敏子　十年

・福

梅本武義　春が来た

春が来た

・羊

3・11の震災番組自白押し津波の映像3Dのこと

十年前の震災の歌読みゆけば原発事故はつい昨日なる

十年をかけて乗り越え来たるもの我慢、あきらめ、悲しみ、失望
フクシマと蔑まされし日々のあり、第二のフクシマ生まれるなかれ
これからがほんとの復興十年は後片づけの時間であった
十年目の鎮魂行事波のこと引きてうらうら春は来にけり
福島の復興かかぐる聖火リレースタートすれどコロナの陰に

吉永惟昭

風化

・熊

復興が風化を誘う日本の本に墜ちてしを知れ　原爆二発

長崎は百万沸の夜景かや　さもあらばあれ　妻の体調
勝つための特攻・玉碎、無差別の空襲戦災遙かに霞む
国敗れ涙が替えし人生に風化し果てぬ罪も誇りも

あの飢えは何教えたか生きるため闇犯罪が許されるのを
大のつく水害・地震二度ずつも天災享けて風化に生きる
我が人生　コロナ禍という項目を加えし災害風化いまだし

磯田ひさ子

終り方

・森

チューーリップの終り気高しくれるるの花びら透けて剥がれ落ちたり

立て札の養生中に息をつく人も芝生も工事現場も

先人はあなに賢し『方丈記』につねに働くは養生なるべし

公園のはしごに付き合ふ先々にさくらがふぶき淨まりゆける
不自然と思へど都会の金魚屋にメダカ五匹を買ひて帰りぬ

布袋葵の根に付くるしか虹色の小さき浮草三つ四つかかる
なにもかも自然に遠き浅草に終りてよきか半世紀過ぐ

わが植えて五十年過ぎる白梅の下にて孫と缶ビール飲む
「春が来た」思えば楽し鶯のまだきこちなき声に微睡む
花壇よりこぼれて庭に咲く莖今年は雑草扱いにする
今日もまた忘れものして引き返し余裕をもちてが駆込みとなる
池主手に歎を探りし跡を見る今年は負けか彼の隣人に
今日は鬱意欲のわから氣休めに作る杭なり何時か役立つ
あの時と思う岐路あり壯年の職場の夢の余韻に浮かぶ

大浪美雪

鬼尽し

・森

下野の荒物店の鬼おろし真竹作りのギザギザ銃し

節分の豆を使いて「しもつかれ」鬼おろしもて大根をみぞれに
九州の血を引くわれの「しもつかれ」鮭の頭なく荒さ足りぬと
（しもつかれ）写真に送るに即返信「フォトジェニックには向かないものね」

鬼退治の絵葉書届き　その後に鬼柚子届く今日は鬼の日
わが裡の鬼よ出でこよ　図書館に予約したるは『鬼滅の刃』
極め付きはCOV-ID-19マスクも二年目となる

奥田陽子

きさらぎの魚

・羊

丈たかき葦の向こうを歩む影帽の白きが動きつつゆく

反射光みな面のきわの葦揺れてにぶく動ける白き驚みゆ

長き身の伏してしまえり枯葦のそこより新芽の顔のぞかせて
梅の木の下にてマスクはすたり過ぎて追いくる高きその香は
幼な子の身を乗り出して懸命に掬えどほそきさらぎの魚

一言を書いてそのまま黙したる男の子汝の言の葉を待つ
風立てば縋身振りて振り落とす雨の光れり冬の楠

小野雅子 無いもの

・羊

北山雪男

残日抄

・伊

一年前と思へば半年前のことと混じり合ひゆく月日の記憶
なにごともなきわが十年 零歳が十歳になり翌年を言ふ
思ひ出しつれも数年前のこときのふはわれにいかにありしや
電話せむと思ひつつ醒め夢に見し人の逝きたることに気づける
幼き日の力士の四股名うかびくる大横綱はいづこにゆきし
歌会始に上皇后の歌はなし「実」といかにうたはれたるや
咲ききりてただ美しき散るまでのしばしの時をとどまる桜

神田鈴子 鎮魂の日

・大

木村文子 空へ

・羊

電腦に別れ告げたる夜である俺より先に逝くなといふに
X.P.、7.、はた10. てんてんと渡るパソコンいよいよ違和増す
新しきパソコン馴染み難くして途方に暮るる老いの祖先
詳細はインターネットで調べよと自己責任のデジタルデバイド
あるや否やネット辿れば「いいね」へと至る手前に幾つの何故が
詩になり得ず燐の影か背を丸めキーボード打つ記帳作業は
スマホには敬して遠きこの親父今日も昭和の貌で飯喰ふ

十年の歳月重し「花は咲く」の歌が流るるみちのくの空
どれほどの苦しみ抱き生き来しか笑顔の奥の思ひを読みぬ
十年の月日はすでに流れたり明るくあれよ福島の海
映像は今もありあり甦る街が津波に消ゆる一瞬
眼裏にかの日見しことなほ消えず三月十一日は「たましづめの日」
あたたかき日の続ざる春彼岸さくらは早も花ひらき初む
コロナ禍に遠出かなはずわが町の知らぬ道にも爛漫の花

菊地栄子 動かぬ数字

・鷗

草刈十郎 コロナ禍

・世

まだ何も芽吹くものなき散歩道 小さな芽吹きを探して歩む
足跡のあまたつきたる雪道に重ねて置きぬ我の足あと
子どもらは手袋ぶら下げ雪原を駆けぬけてゆく春呼びながら
晴れやかな飛行機雲を仰ぎみる 今日も誰かが生まれ、亡くなる
くきやかな一筋の雲しばらくをみつめておりぬ風に散るまで
銀色のふっさりとした芽吹きあり林のなかの小道を行けば
木蓮の花芽はひかりを弾きつつ春の空へ 空へと伸びる

垂りくる屋根の積雪のとどろきは身を打ちてくる警策のよう
冷たき手医師にさとられ今更に父母より受けし命を思う
花掉して凍れる夜に毀ちたる賜りものの壺も幻
祝日の嵩張る新聞抱えくる配達員は汗滴りぬ
菜の花のつぶらな薔薇通しし浅瀧けおひたしうつくしき春
誰ひとり会わずに済みしウォーキング等間隔の街灯の道
苛立ちて動かぬ数字に眼ゆくわたしの番号二十七番

國井節子

梅も桜も

・春

近藤栄昭

小豆すくい

・虹

二月堂に火の粉舞ひ散るお水取り千有余年の祈りの重さ
 ひとすぢの夕べの光たゆたひて二つの塔を浮かべる大池
 思ひのまま紅と白とを咲き分くる梅も自白も亡き夫の友
 春風は黄と薄紅を連れて吹く手作りマスクで花に逢ひに行く
 天空に良き事あらむ白鷺の二羽舞ひ踊る朝の大空
 三月は佐保の女神のお目ざめか梅も桜も共に咲き出す
 しだれ梅したるるままに揺れて咲く老いのまなざし焼き付けて来る

河野繁子

風の音

・雁

近藤芳仙

現実世界

・信

暗闇に光のゆれて人歩む明ければ自肅の世が開けゆく
 夕べみし「蟬しぐれ」まだ残りいて霜おく朝のカタクリの花
 樹の下の俾に眠る幼吾を舐めたる馬の話せし兄
 なめられて泡もぐれなる嬰兒は昭和一桁米寿となりぬ
 生れたるは大阪阿倍野区樹がありて馬つなげしと田舎の景色
 泉下には言葉とどかず仰ぐ山こぶしの苔霜に消えおり
 火星より持ち帰りたる風の音目にはチャートの耳に響かず

小林能子

あの日から

・羊

坂上直美

弥生

・天

『常陸國風土記』ゆかりの地を歩く三年越し筑波山の姿にひかれ
 涌く水の谷津田の空は高く澄み東日本大震災前夜
 その翌日余震続くなか富田家の手づくりの味噌水戸より届く
 吾子らは無事とのメール繋がらぬ電話よ水戸、高萩、福島…
 産土の村松虚空蔵尊菩薩子らの未来を護らせ給へ
 あの日から十年東海第一原子力発電所に運転差し止め判決下る
 東海村は首都圈ですと穏やかに原発塔に近くすむひと

外秩父小豆すくいは定峰崎小さき筍の麺小豆こばれる
 水道の水は腕から手にまとい泡流しゆく静かに温らし
 キッチンの皿洗いいて水なじみ梅雨の温水身体をぬらす
 二の腕を泡ながれゆく水に乗りうぶ毛に彈かれビチピチ泣いて
 君のいう街に住めぬはワガママと寒さに耐えて人に耐えるよ
 ゆくは変ゆかぬも変とシネマへと感想は忍耐鬼滅の刃
 流行歌二十年後にリズム合う今の流行りを持ってゆけぬか

坂出裕子 川辺

・洛

篠原まり子 春の気配

・春

みづうみで冬を越さむと渡り来し鶴か川面に羽をやすめて
さざ波を立てて流れゆく水を見て帰り来ぬけふも事無し
コロナでも春は来るらし道の辺の桜のつぼみ日ごとふくらみ
外つ國ゆ電話かけ来る子のあればコロナの冬のすこし明るむ
子に孫に力もらつて生きてる嬉しいやうなさみしいやうな
小さな花の鉢買ひ戻り来ぬコロナの冬の朝の散歩に
お日さまの光いっぱい浴びてよねひなたに出しぬデージーの鉢

佐久間晟 夏 湾

・甲

柴田登志恵 青

・天

寂しくも夏も迎える今年また何と愚かなどこのかの戦争
靖国神社などと崇められ何になる要は命を捨てたるのみにや
反骨の思いは年毎に強くなり何故の戦か思いは知らず
あの人も彼の人も戦に死にゆきぬされど生きてるは仕掛けし人ら
強がりを言つても今は仕方なしだ茫茫の余生に生きん
死に近き歳と思えどいや未だと己れに諭し今日も生きてる
この頃は死の歌だけが眼につくと言われてみればそうかも知れず

佐藤道子 コロナ

・甲

鈴木結志

五輪聖火

・福

一瞬の青の不在が翡翠の狩り見しといふ都市の伝説
木蓮の白落つるたび縁側に居眠る猫見る空を飛ぶ夢
あざやかな繁殖羽へと変化せし嘴広鷗の帰北近かり
あかときの青に透かさるる月白く列なし鷗の渡りはじめる
冬鳥の立ちゆきしあとの海辺にはさらし首など並びるるやも
夜ごと降るあたかき雨の語りつぐ宙の言の葉太古の記憶
雛飾る表座敷のにぎはひに猫は縁から日の中へ出づ

どれ程の涙紋りしこの冬の結露拭うタオルを置む
三一復興音うレディガガ羽生結弦と悲しみ消えず
蝶の火は同じものなく揺らぐ中密かな流れ高島野十郎展
ミヤンマーのクーデターはマンダレイ猛火に消えしレベッカ「R」
友の顔彼岸此岸の差別なく夢に語らう深夜は楽し
野の花を知らぬ小鳥にせめてもとテーブル一面散らす菜の花
まびき菜と娘はさりげなく言うけれど教える術なし小さき命を

福島の復興照らす聖火なれ思ひの深く短詩をおくる

・羊

マスクせず散歩の私は異星人マスクマスクよ地球の人は
名を呼べば鎖引つぱり駆けよりぬ馴染みとなりしよ散歩の犬と
久々に出会いひし犬は挨拶に覚えたばかりの「伏せ」して見せる
友達と遊べぬ子等のさみしさよ散歩の犬も寄りたがるのに
満開の桜に見知らぬ人と人綺麗ですねと話が弾む
夢に会ふ夫はいつも元気にて軽く手を上げ私に合図す
夫の名で取り寄せケーキ在さねど在すがごとく皆で楽しむ

閔根榮子

日本タンボボ

・埼

高津砂千子

満ち潮

・風

山歩きはるかとなりて思い出す崖上に咲きいし一本桜

レタスの苗求めんと来て目につきし空豆の苗五本ほど買う

ふる里の寺の彼岸会咲き盛る連翹の黄金の生垣めぐる

道端の蒲公英の花をたしかむる日本タンボボまだ見つからず

趣味に行く場所の閉鎖に貿物が一つの仕事になりたる夫は

自肅にも倦きてきたれば取り出だす本は『日本ローカル線の旅』

衣替えの手の止まりたりプローチを付けいしままの服の出でくる

閔根和美

訛り

・埼

上州の赤城の神の血をすぐ聖き名と知る血洗島は
栄一のドラマの訛りによみがえるふるさとの景亡きひとの顔
利根川をはさみ武州と上州に分けらるもひとの往来しげき
鄙の地と侮るなかれ三百年利根の水運江戸へと至る
桑畑やおかいこ様に連なれば育くさきかな幼年の日々
北武藏の羽生にのこる藍染めの工房のにおい小暗きへやの
あれほどにはひどくなかったと笑いつつまたも頷くその方言に

高尾恭子

春のはじまり

・大

立春の日差しあかるく青空をうつす玻璃戸をきゆるきゆるみがく

てのひらの僅にちんまりおさまって金平糖は五彩をはなつ

日常を5キロはみ出しペダル漕ぐ車でもなく電車でもなく

表情を隠すマスクに隠されぬ底なしの沼の眼のしめり

遅咲きの今年の梅を見納めぬ(思いのまま)にならぬ身なれど

医学部の扉ひらけば卒業の椅きりりと明日の看護師

ひやくまいのメッセージカードを貼りつける白木連の春のはじまり

田土成彦

蓋

・宙

何をする氣にもなれない三月の春愁喪失抑うつ憂鬱
泣きたくて泣けないやうな笑ひたくて笑へないやうな週末つまんない
指折りて失ふ幾つを数へてゐるもはや明日などどうでもよくて
笑ふことを忘れて過ごす三月の失つたもの捨てて行くもの
孤高なるひとりにあらねば黄昏を俯きてただ本読んでゐる
うつ伏せに眼の毎日わたしから心が逃げてしまはぬやうに
憂鬱は春の道連れ詮方なきこと幾たびも考へてゐる

滝田靖子

三月

・新

死に近き姉の望みは海だった海が見たいと遠き目をした

子や孫にこころ開かず逝きし姉海を見たいとわれのみに言ひ

病む姉の体ささうる力なき吾をくやしみき地団駄踏めど

ただひとり波うちさぎに佇めり姉のうつし絵しかと抱きて

海水のつめたき夏のなきさ辺によるこびし姉浮かびくるはや

打ち寄する波おわりなき当然に姉のきびしきひと世顯ちくる

満ち潮となる渚辺を去らんとすまた来るからと写真の姉に

田 土 才 惠 飛 燕

・宙

竹 下 妙 子 さくら花

・霧

節たかき母に似る指折りてゆく折り紙の箱母のしぐさに
包装紙もつたいぶってたたみゆく紙の折り箱作らんがため
春来れば育ちゆくさま目に見えてついに離れて住まう子ひとり
合格を喜ぶことと離れ住むこと相容れる前のさみしさ
じじむさくならないよう二一人して行く手に飛燕若草のうえ
リモートの卒業式に映りいる榜のおみなごわが女孫なり
菜種梅雨立ちはだかりて山行きのプランはやばや取り消しとなる

玉 井 綾 子

人事異動

・羊

今までに経験したことのない危機コロナ禍中の異動は激し
年下の役職者の増す人事異動一年頑張る意味考える
五十路での異動は押し出しされることキャリアアップの意味もはやなし
数年を経れば必ず異動する 会社も社員も賭けを続ける
担当をなくしても残る必要な仕事を引き受けるのは総務部
人事異動 社員は会社の一存で今のキャリアと暮らしをなくす
利益出ため派遣切り今日までの職場の仲間が失業者となる

虎 谷 信 子

彼岸の頃

・伴

散るもよし散らざるもよしさくら花地に還りゆく命なりせば
夜ざくらの下をしゆけばしばらくと花しぐれ降るとどまらざらむ
幾たびの東日本大震災声なき声の人探しるる
新型のコロナウイルス蔓延し老いづくわれはさ迷ひゆけり
薄墨とかがやく雲あり透きし雲あなくらがりに星滲み出づ
残り鴨春のみぞれの降る川にかすかに啼きて思ひ漂ふ
幾年を生きつきて來し桜木の小雨を浴みて春深みゆく

久 我 田 鶴 子 自由

・羊

フルスピードで逃げてもたかが知れてる高齢者なんだつてさわたしたち
おどろいた 介護保険のカード届き税金はらへと督促状も来る
背すぢ伸ばしさつさと歩いてゐる (つもり) またスニーカーに追ひ抜かれたり
気持ちはさ若いまんまだから困つちやう 檜原村の元気は語る
亭主おくりひとり暮らしの今がいちばん幸せといふ嘘のない顔
年とつて元気のもとに自由ある 煙があればやること尽ぎず
くりかへし結束バンドのことばかり詠ひし頃の柏原さん

彼岸会の塔婆とときぬ 新しき。仏間ととのへ まつり申しぬ
仏前のお花とのへ 手づくりのお萩^{たけ}一色 供へ合掌
菩提寺の 墓仕舞するといふ。親しき人よ そんな事出来るの
わが庭の桜満開 遠目にもよき花見とぞ 告げくる人
仔猫なれ 桜花びらそばへてる。吾はひねもす 国会中継
エイプリルフール 親しき友と恋人の、ことなど云ひて大笑ひせし



《特集》

玉井綾子 あっラカルト

☆短歌 ジェンダー

☆歌人論 中城ふみ子の短歌における

「白」と「林」

☆歌人論 久我田鶴子

九冊の歌集にみる変化

Ayako Tamai

玉井綾子、一九六九年生まれ。小野茂樹・雅子の一人娘。一歳の時に父が他界したため父の記憶はないが、家には地中海誌が並んでいて、香川先生の名前をよく聞くなど、「地中海」は傍にあるものだった。しかし私自身が短歌に興味を持つことはなく経済学部を卒業し百貨店入社。二十九歳で結婚し実家を離れてからなんとなく日常生活を短歌に表現し始め、地中海入会。三十代はずっと仕事中心だったのが四十二歳で出産。育児勤務中に久我さんに声をかけられ、編集作業の手伝いを始めた。四十七歳で第一歌集を上梓したが、短歌への知的好奇心が目の前の生活や他の興味より優先されることにはなかなかならなかつた。

私が追い込まれないとやらないタイプと知つてか、本誌コラム「遊覧寄港」の担当や、「歌壇月旦」を書く機会等をいただいている中での今回の「あっラカルト」。せっかくなので女性歌人論を書いてみようと思ったものの蓄積がなく、人となりを調べやすい中城ふみ子と、身近な久我田鶴子さんの歌集をとにかく読んで考えた十ヶ月。二人の歌を追いかながら今のジェンダー問題を考えたり、書き終わってみれば楽しかつた。新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言で家にいる時間が増えたおかげで書けた内容です。

(玉井綾子)

電車では膝くつつけて座るべき ジェンダーフリーを消化出来ない

母親の下の世話まで男性の看護師がすると友の嘆けり

男性が掃除中との看板の立つ駅トイレ負い目を流す

ニュースにて「女」と言えば犯罪者 女性キャスターの目のつり上がる
レディースティーの不平等を言う男性に既得権益だと胸を張る

好きな色を覚える前にらしき色をわきまえている平成の子ら

PTA役員の言う「会長は男なの。今も。これからも。」

閉経をすれば女でなくなるとなかなか止まぬ不正出血

「白」「林」は中城ふみ子の、「転生」「菜種梅雨」は久我田鶴子のキーワード

緊急事態宣言下での出勤に白いダウンのコートを羽織る

愛人の実名入れし歌を詠みふみ子は針葉樹林に眠る

コロナ禍に不登校になりし子の親 新学年での転生祈る

満開に浮き立つ人の出足止めウイルスを退治せよ菜種梅雨